
勝利の女神を喚び出せば

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝利の女神を喚び出せば

【著者名】

ナリ

Z5856Z

【あらすじ】

いきなり召喚されました。と思つたら失敗?え? 用無し?
召喚ファンタジーのような、おっさんとの恋愛話のよつな。(

中編)

事の始まりはこゝだ。

上司から仕事の呼び出しを受け、急いで家を出た瞬間、ぐんと体が下に引っ張られるような感覚がした。
そしてハツと気づいた時には、私は見知らぬ場所で、見知らぬ人々に囲まれていたのだ。

後で分かる事だけど、その時私はクロッカという國のお城の広間に召喚されていたらし。周りにいる人々は、王様や大臣といった偉い人と、彼らを守る兵士たちだった。

「おお、本当に成功した」
「召喚が成功したぞ！」

大臣っぽいお爺ちゃんたちが興奮気味にささやく。
突然違う世界へ来て呆然としていた私だが、瞳だけはせわしなく動かして、自分の置かれた状況をなんとか把握しようとしていた。

私の足元には召喚陣らしきものが描かれており、正面を見上げれば、玉座に座つた王様がこっちを讶しげに見つめている。

「我らの呼びかけに、アプロディー様が応じて下さつた」

感動したように言つお爺ちゃんたちの言葉を、王様がさえぎる。

「待て。こんな小娘がアプロディー様とは思えん」

『小娘』だと?
私はむつと顔をしかめた。

「おい、お前」

不遜な態度で王が言つ。まだ年も若く、金髪碧眼のイケメン王だけ、こちらを見下しているような口調や表情がいちいちカッコに触る。

人の性格というのは、結構しぐさや雰囲気に出るものだ。この王様からは高慢で自己中な匂いしかしない。

「お前は本当に”勝利の女神” アプローディー^テか?」

その質問に、私は目を丸くした。

勝利の女神アプローディー^テ?え、誰が?

きょろきょろと周りを見回しても、広間の中心には私しかいない。王様の視線もしつかりとこちらに向けられていて……

私が勝利の女神? まさか!

「女神だなんてめつそうもない。私はそんな崇高な存在ではないです」

慌てて否定する。訳の分からぬまま召喚されたかと思えば、女神に間違われるなんて。

「お前はアプローディー^テではない?」
「はい、違います」

再度、王様から問われて、私は大きくなづいた。

すると今度は、彼の眉間に深いしわが刻まれる。片眉をつり上げて私の一番近くにいた中年のおじさんを睨みつけると、

「貴様、失敗したな？ ただの人間の小娘を召喚して、どうして戦争に勝てるというのだ。私は勝利の女神を呼び出せと言つたはずだ。隣国シロルとの戦争に勝てるように、勝利の女神を呼び出せとな」

冷たい口調で責めた。責められたおじさんは顔を青くしながら言う。

「し、しかし陛下……私も召喚術などとこゝものを使うのは初めての事ですし……」

彼の弱々しい言い訳を聞いていくと、どうやら召喚術というのは、この世界でも特にポピュラーな術ではないらしいという事が分かった。

なんでも最近見つかった五百年前の文献の中に『勝利の女神を呼び出して戦争に勝利した』といつ記述とともに、召喚のやり方が書いてあつたのだとか。

そしてそれを見た王様が、「やつてみせらる」と陛下のおじさんにムチャぶりしたようだ。そりや無理だよ。

尋常じゃない冷や汗を流しながら言い訳を続けるおじさんを見て、私は少なからず同情の念を覚えた。

召喚術なんて本当にできるかどうか分からぬものだったんだから、私を喚べただけでも褒めてしかるべきじゃないか。

ただのおじさんが召喚術使ったんだよ。すじこよ、このおじさんは。

しかしそこで、私はハツと我に返つた。

見知らぬおじさんに同情している場合ぢゃない。本当に可哀想なのは、その召喚に巻き込まれた私ではないか、と。

何だか急に怒りが込み上げてきて、思わず王様に「私を元の世界に帰してください」と詰め寄りつとした時だった。

「どうかお許しを、どうか……『やあやあああ…』」

野太い悲鳴が耳を突く。

真つ赤な血しぶきが、私の視界を汚した。

「失敗は失敗だ。使えぬ家来などいらん」

辛辣に吐き捨てる。私の目の前で、おじさんはすでに息絶えていた。

王様から命令を受けた兵士が、召喚に失敗したおじさんを容赦なく斬り捨てたのだ。

恐怖のあまり叫び出しそうになつたが、喉がつかえて声が出ない。体から血の氣が引いていく。

どうしよう。私、とんでもないところに来てしまった。ここは私がいた平和な世界とは違うのだ。

今更ながらそう実感して、細かく体が震え出した。

「さて、では、勝利の女神でもなんでもないお前をどうするか

玉座の王が氷のような瞳で私を見下ろし、言つた。

勝利の女神アプロティーテと間違われて召喚され、このクロッカ国にやつて来てから3ヶ月。

私は一応、まだ生きてます。

私を呼び出したおじさんは殺されちゃったし、元の世界に帰ることもできないまま、お城の片隅でひっそりと日々を過ごしてきたのだ。

不遜な王様とは、あの時以来会っていない。会いたくもないけど。

うわさでは、王はもう召喚術で女神様を呼び出すのは諦めたようだつた。大昔の文献に載つていただけの不確かな術だつたし、それに時間をかけていられないと思つたんだろう。

まだ本格化していないとはいえ、このクロッカ国は今、隣国のシリルと戦争中なのだから。

「夕食をお持ちしました」

静かな声とともに扉が開く。料理の乗つたカートを押して、ひとりの侍女さんが部屋の中に入ってきた。

私はあの王様に殺されはしなかつたし、一応この城の中には置いてもらえているけれど、特別に良い待遇を受けているわけでもない。

私にあてがわれた部屋は城の中の一室だけあつて広いものの、簡素なベッドとテーブル、椅子があるだけの寂しい部屋だった。北側にあるのか日が入らず、昼間も薄暗くて、ちょっと素敵な監獄みたいなのだ。

何度か挑戦してみたけれど、扉の外には見張りの兵士がついて逃げ出すこともできない。

私はため息をついて椅子に座り、テーブルに乗せられていく料理を眺めた。城で働く使用人たちの食事とほとんど変わらないと思われる、つつましいメニューだ。まあ、ごはん貰えるだけマシかな。

この城の人たちは、私の遭遇を考えあぐねているようだつた。“勝利の女神アプロディーテ”でないなら用はないけど、召喚術のことをペラペラ喋られても困るので、簡単に城の外に放り出す事もできないのだろう。

それに大臣などの偉い人の中には、『召喚術で出てきたのだから、やつぱり”勝利の女神”としての資質はあるのでは?』と期待している人もいるみたいだつた。

この3ヶ月で色々やらされたもんなー。

私に軍師としての才能もあると思ったのだろうか、地図を広げられて「どう戦つたら勝てるか」などと戦略を聞かれたり、戦に勝てるような方角や時期を占つてみると言われたり、あげくの果てには剣を持たされて、兵士たちの訓練に放り込まれたり。

だけど私には戦術の事はさっぱり分からぬし、占いだってできない。もちろん敵を百人も千人も斬つて、この国を勝利に導けるほどの剣術も体力も運動神経もない。

ここへ来るまで、私は平和な世界で戦争とはかけ離れた生活を送つていたのだから当たり前だ。

「大丈夫ですか?」

食事を運んできてくれた侍女 マリンさんが、うつむいていた私の顔をそつと覗き込んで言った。

心配をかけてはいけないと、私は笑顔を作る。

「大丈夫です、考え方してただけなので。ありがとう」「食事、全部召し上がりくださいね。体力をつけないと」

マリンさんは優しく言って、部屋を出ていった。私の世話をしてくれる侍女さんは3人いて、交代で食事の用意やら部屋の掃除やらをしてくれるのだが、マリンさんは何かと私のことを気にかけてくれる。

私が他の世界から間違つて召喚されたという事を知つていて、不憫に思つてくれているのだ。

ちなみに他の侍女さん2人は何だかツンとした雰囲気で、用事がある限りは話しかけてこない。

マリンさんがいてくれたおかげで、私はこの3ヶ月何とかやってこれた。彼女の優しさに触れていたから、見知らぬ土地で独りぼつちでも精神をまともに保ってきたのかも。

なんたつてこの城にいる人々は、あの独裁的な王様をはじめ、自分たちの保身に必死な大臣たちなど、自己中心的な人が多いから。私が会話した事あるのはこの城にいる一部の人だけだが、権力を持つている人ほど、性根の曲がった嫌な人が多かつた気がする。

そしてそんな腐った人たちの手に、私の命運も握られているのだ。薄味の食事を黙々と口に運びながら、どうにかしてここから逃げられないかと思案した。

よくも悪くも事態が動いたのは、それから1週間後の事だつた。

昼食を食べた後、する事もなくぼーっとしていると、ノックも無くいきなり部屋の扉が開いた。ドカドカと床を踏み鳴らして入つてきたのは、王様と彼を守る近衛兵、そして大臣たちだ。

「な、なんですか？」

私は椅子から立ち上がり、身構えた。

最近毎日のように脱走しては見張りの兵士に見つかって連れ戻されてるから、いい加減、王様の方にも報告が上がったのかもしれない。

王様は尊大な態度で言つた。

「お前の処遇が決まつた」

その言葉に、私の背筋がひやりと凍る。

もうそろそろ来る頃だと思っていた。この3ヶ月で色々やらされて、私が勝利の女神でないことは裏づけられたから、正式に用無しになつたのだ。

そしてその用無しをいつまでも城に置いておくほど、この王様は甘くない。

「アプロディーテではないお前に、もはや存在価値はない。……これを受け取れ」

王のふところから取り出され、一いちょうに投げられたのは、紫の液体が入つたガラスの小瓶だつた。

「なんですか、これ？」

顔をしかめて言つ。

答えは何となく分かっていたけど。

王様はフツと口角をつり上げて笑つた。

「毒だ。それを飲んでさつさと死ね。言つておくが、これは私の慈悲だぞ。その毒はゆづくつと体に作用し、眠るように死んでいける。苦痛を伴わずにな」

手の中の毒薬が、ずんと重みを増した気がした。

王様は続ける。

「普通なら問答無用で斬り殺すところだが、お前は我々の召喚に巻き込まれただけだしな。これくらいの情けはかけてやるのつかと思つたのだ」

田の前にいる王様が、どうしてこんなに横柄な態度をとつているのか分からぬ。

相手の事を責めて、許すか許さないかを決める権利を持つてているのは、私の方だと思つていたんだけど。

だつて召喚なんて言つて、やつてゐることは誘拐と同じじゃないか。おまけにそれに対して謝罪もせずに、用が無いから死ねだなんて。こんな理不尽なことつてない。

私はわざとゆづくつとした動きで、小瓶を握つた手を上げた。腕を伸ばし、王様に向かって拳を掲げる。

王様に大臣に兵士たち、この部屋にいる全員の視線を感じながら、私は握り込んでいた指を広げた。

「いんな毒は必要ありません。私、死ぬつもりなんてないの」

毒薬の入った小瓶は私の手から滑り落ちて石の床にぶつかり、パリンと高い音をたてて割れた。紫の液体がとろりと広がっていく。

王様は一瞬目を見開いた後、口元を引きつらせながら笑つて言った。

「そりが、毒は必要ないか」

と、そこでぐんと声を低くする。

「ならば痛みにうめいて死ね」

王様がぱちんと指を鳴らすと、隣に控えていた兵士のひとりが静かに歩み出てきた。腰の剣に手をかけて、私の方に近づいてくる。私がこの鍛えられた兵士に勝てるなんて思つていなか。だけどまだ死にたくないから、みつともなく抵抗してやる。

今まで誰かを殴つた事なんてない私だが、今は妙に闘志に燃えていた。アドレナリンが出てハイになつていてるのだろうか、あわよくば王様の顔面に1発ぶち込むぞ、と物騒な事まで考えていた。

すらりと剣を抜いた兵士を、ぎろりと睨み上げる。視界の端で王様がニヤニヤと笑つているのが気に触る。

私が動物だつたら、きっと今、毛を逆立たせてうなり声をあげているに違ひない。

おかしいな。私はこういう時、可愛く震えて涙をこぼすよつなキヤラだと自分で思つてたんだけど。

兵士が剣を振り上げて床を蹴る。私は目をつぶらなかつた。だつ

てそんな事したら、剣を避ける事ができなくなるじゃないか。

が、剣は私に届く前に止まってしまった。
キンと高い音が部屋に響く。

「……！」

私は目を丸くして固まつた。
だつて私と、私を襲おうとした兵士との間に、いきなり第3者が
立ちはだかつたのだから。

「お嬢さん、意外と気が強いねえ」

私をかばつて剣を抜き、兵士の攻撃をやえざつたのは、

「ま。おじさん、そういう子好きだけど」

やけにのんびりとした空気をもとつた近衛兵のひとりだった。歳
は30代後半くらいで、私にとつては確かにちょっとだけおじさん
だ。

しかし今はそんな事どうでもいい。彼も他の兵士たちと同じく、
王様側の人間のはず。

なのにどうして私をかばつたんだろう。

「何のつもりだ、グルド」

王様が冷えた声で言つた。苛立つてゐるのか、こめかみがピクピクと痙攣している。

私を助けた近衛兵 グルドさんは、すつと目を細めて笑つた。

「いやあ、彼女が殺されなきやならない理由が見つからなかつたもんで」

口調は柔らかだが、その声は低く、迫力があった。私をかばうよう立つてゐる彼は、背が高く筋肉質で、ゆるいくせ毛が特徴の黒髪だ。

この人の事は今まで何度も何度か見たことがある気がする。自分の身を守るため、近衛兵を常にそばに置いている王様だから、私が召喚された時にも、あの広間にいただろう。

もしかして剣の才能があるのでないか、と私が兵士たちの訓練に放り込まれた時にも会つていたと思う。上官なのか、若い兵士たちを指導していたはずだ。

だけど、今まで何度か顔を合わせていても、彼は私に興味のあるそぶり、あるいは同情しているようなそぶりなんて見せなかつたのに。

なのだがして今、じつやつて助けてくれたのだろう。

王様の命令を受けて私を襲おうとした兵士は、グルドさんの妨害を受けて数歩下がつた。グルドさんは剣を構えたまま、堂々とした

態度で王様と向かい合つ。

「望んでもないのに召喚されて、知らない人間だらけのこの国にやつて来たのに、勝利の女神じゃないなら用無しだと切り捨てられるなんて、あんまりだと思いまして。あんたらが謝罪する必要はあっても、彼女が死ぬ必要はないでしょうよ。今まで黙つて見てましたけど、今回は口を出させてもらいますよ」

逆らわれたことが気に食わないのか、王様は厳しい顔つきでグルドさんを睨んでいた。他の兵士や大臣たちは、「なんて馬鹿な事をするんだ」という表情をして、自分たちにとばっちりが来ないかと怯えている。

私も自分の事を差し置いて、「この人こんな事して、これからどうするつもりなんだろ?」とグルドさんの心配をしていた。この王様に楯ついて、無事でいられるとは思えない。

「グルド、貴様がそんなに馬鹿な奴だとは知らなかつた。お前はいつもから私に説教できるほど偉くなつたんだ? そんなに死にたいのなら、その小娘もろとも殺してやろう」

王様の言葉を受けて、部屋にいた10人ほどの兵士たちが一斉に剣を抜いた。大臣たちは慌てて隅の方へ後退していく。

じりじりと近づいてくる兵士たちを牽制するように、グルドさんが剣を握り直した。

「私の近衛兵に採用したくらいだからな、お前が強いのはよく知っている。しかしさすがのお前でも、10人の兵士を相手にするのは厳しいのではないか?」

王様がしたり顔で笑うと、グルドさんも困ったように笑つた。

「まあ、そうですね。10人はまきついたなあ」

認めるなよ！

私は心中でつっこんだ。セイは嘘でも余裕だと黙つてしまい。王様はさらに笑みを深める。

「もしお前とその小娘が私への非礼を詫びるといつてなら、命だけは助けてやらんでもないぞ。床に頭をこすりつけて土下座し、私の靴を舐めてみせらる」

そう言つて、王様は自分の右足を一步前に出した。グルドさんはゆるくほほ笑んで、後ろにいる私に声をかけてくる。

「じつある、お嬢さん。靴を舐めて許しを請つか、反抗しておじさんと一緒にじじから逃げるか」

「おじさんと逃げます」

速攻で答えると、グルドさんはフツと笑つて剣を鞘に収めた。

「よひしー」

これからこの兵士たちを倒して逃げなきやならないのに、じつして剣を仕舞うの？

私がそんな事を思つていると、グルドさんは敵の兵士たちに背を向け、素早くこちらに走りよつてきた。その勢いを落とさぬまま私のお腹に腕を巻きつけ、抱き上げる。

「あやあー」

肩の上に乗せられて、視界が反転した。

何だ、何だ？？ 私を抱えてどうやって逃げるつもり？

私が混乱している間にも、グルドさんは動きを止めなかつた。人ひとり抱えているとは思えないくらい俊敏に、兵士や王様がいるのとは反対の方へ部屋の中を駆けていく。

ちょっと待つて。そっちにあるのは……

「逃がすな！」

後ろで王様が叫ぶ。兵士たちの足音が近づいてきた。

グルドさんの目の前にあるのは大きな窓。この国では窓は基本的に開いたままで、雨が振った時や夜の間だけ木戸を閉めておくのだ。つまり、太陽が眩しい真っ昼間の今、窓は開放的に開け放たれていて

「一二三四階———つ……！」

悲鳴の代わりにそう叫びながら、私はグルドさんに抱えられたまま窓から飛び出していた。

死ぬ、死ぬ！ 地面に体ぶつけて死んでしまう！

グルドさんの服をぎゅっと握つた。全身に強い風を受けて、胃がひっくり返るような感覚がする。

かと思うと、次の瞬間にはもう、私たちは地面に着地していた。

正確に言えば、枝をバキバキに折りながら庭の低木の上に落つっていた。

「いたたた」

落ちた衝撃で頭がくらくらする。しかしどこも怪我はしていない。骨も折れてないし。

クッシュョンになつてくれた低木のおかげか、と、体を起こすと、私の下に倒れていたグルドさんと目が合つた。
あ……。クッシュョンになつてくれたのは低木だけではなかつたらしい。

「だ、大丈夫ですか？」
「ん、ダイジョブ」

心配したけれど、グルドさんも特に怪我は無いようだつた。服についた葉っぱを払いながらゆっくりと体を起こす。

上を見上げると、3階の窓から兵士たちがこりこりを覗き込んでいた。追わなきやならないけど落ちるのは嫌だし、といった感じで迷つてている。

「すぐに追えッ！ 早くしろ、グズズもッ！」

と、その窓の奥から王様の怒鳴り声が聞こえた。逃げられた怒りと焦りがにじんでいる。

べーだ、ぞまあみろー！

私が窓の方に向かつて舌を出していると、

「可愛いけど、今はまだその舌仕舞つときなさい。完全に逃げ切るまでは安心しちゃダメだよ」

グルドさんは私の腕を掴んでまた走り出した。足を動かしつつ、指をくわえてペコリーと笛を鳴らす彼を、「何してるんだろ？？」

と思いつつ見つめる。

今私は、裾がすねの辺りまであるドレスを着ていた。普段着用のものらしいけど、ドレスなんて着慣れない私には動きにくくて仕方がない。元の世界ではもう少し身軽な恰好をしていたのだから。靴はヒールのあるブーツだし、このまま走つて逃げるのは無理がある。

「グルードさん!」「一旦どこかに隠れませんか?」と提案しようとしました時だった。

「どうからか荒々しいひづめの音が響いてきたかと思つて、突如として、目の前に大きな黒い馬が飛び出してきたのだ。グルードさんがさつき鳴らした笛笛は、この馬を呼ぶためのものだつたらしい。」

「馬に乗つた」とは?」「ありません!」

走つて馬に近づきながら言つ。

「分かつた、前に乗つて」

グルードさんは自分が馬に乗つた後で、私を鞍の上に弓を上げてくれた。

うわわ、馬の上つて結構高い。

「いたぞ!」

城から出てきた兵士たちが、剣を手にひきりへ駆けてくる。

「鞍を掴め」

グルドさんは私にそう言いながら、自分は手綱を握つて、馬の腹を蹴つた。

「待て！」

人の足では馬には勝てない。走り出した私たちと兵士たちとの距離はどんどんと開いていく。

「開けろー。」

突然、グルドさんが前に向かつて叫んだ。そこには侵入者を防ぐ大きな門と、それを守る警備兵たちがいたのだ。

「え、あ、近衛の……」

警備兵の何人かは、グルドさんの顔に見覚えがあつたようだ。

「急げ！」

「は、はい！」

グルドさんの迫力ある声に急かされて、警備兵は慌てて門を押し開けた。彼らはグルドさんと私が王様に逆らつたことなんて知らないもんな。

「開けるなー！」

追つて來た兵士たちが後ろで叫んでいるが、もう遅い。

私たちが乗つた黒毛の馬は、すでに門の外へと飛び出していた。

城を出てからずつと、グルドさんが馬の速度を緩めることはなかつた。結構お尻が痛いんだけど、いつ追つ手に見つかるかも分からぬ状況で「ちょっと休みたいです」なんて言えるわけもなく。グルドさんも私のお尻事情に気づいているようだつたけど、

「なるべく城から離れたいんだ。もうちょっと我慢してくれ」

と励まされた。

大丈夫。見つかって殺されるのは嫌だし、お尻の痛みくらい我慢します。

というか今はそれよりも、グルドさんとの密着具合のが気になつたりして。

逃亡中にこんなこと考えるのもなんだけど、落馬しないようひとグルドさんは片腕を私のお腹に回しているので、後ろから抱きしめられているような感じがして恥ずかしいのだ。

私は今まで、異性とこんなに近づいたことなどなかつた。元の世界でも女性と接することの方が圧倒的に多かつたし。

グルドさんと密着している背中が熱くてたまらない。心臓が爆発しそうだ。

「大丈夫か？」

鞍を掴んでうつむいていたら、グルドさんが私の耳元にそつと唇を寄せてささやいた。

「だ、大丈夫ですっ！」

慌てて顔を上げたせいで、私の頭がグルドさんのあいりヒットする。

「痛い……」

「すいません、ごめんなさい！」

顔を赤くしながら、あわあわと謝罪する。

「石頭だねえ……えっと、そういう名前を聞いてなかつたな」

グルドさんは片手で手綱を握りながら、彼のあごとぶつかつた私の頭を撫でてくれた。

優しいな、この人。

「あ、私チノと言います」

「チノちゃんか、やっぱり珍しい名前だな。聞き慣れない響きだ。チノちゃんはこことは別の世界に住んでいたんだろう？」

「ええ、そうです。ここよりずっと平和で穏やかなところです」

質問に答えながら、自分がいた世界を思い浮かべて泣きそうになつた。優しい友達、尊敬する母、彼女たちにはもう会えないのかな。暗く沈みそうになる思考を、今は悲嘆にくれている場合じやないと切り替えて、話題を変えた。

「これから私たちどうすればいいんでしょう、グルドさんは今、どうへ向かって馬を走らせていい……ッ！」

痛いっ！ 舌噛んだ！

馬に乗りながら喋るのは危険だ。

そんな私を見て、グルドさんは笑う。

「気をつけて。行く当てはあるよ。詳しいことは馬を降りてから話そうか」

それからしばらく、私たちは黙つたまま走り続けた。私は背後のグルドさんの体温にドギマギしつつ、通り過ぎていくこの国の景色をじっと眺めていた。

今までずっと城の中にいたから、外の様子は分からなかつたし。

城に近い町は大きく、人通りも多かつたけど、活気はなく静かだつた。みんな暗い顔をしていたのも印象的だ。

城から離れていても町の様子に大きな変化はなく、むしろひどくなつていつた。ボロボロの服を着て無氣力な顔をしている人や、やせっぽちの子供たちを何度も見た。

城にいる王様や大臣たちは派手で豪華な衣装を着て、きらびやかな宝飾品をたくさんつけていたのに。

私の世話をしてくれていた侍女のマリンさんに戦争のことを聞いたとき、「この国はいつそ負けてしまった方がいいのかもしけません」と、独り言のように呟いていたことを思い出した。

クロツカ国は立ちいかなくなつていてるのかもしけない。あの王様が頂点にいるのだから、しょうがないとも言えるけど。

クロツカと戦争をしているというシロルはどういう国だろう。クロツカよりは良い国なんだろうか？

日が落ち、辺りが暗くなつてくると、私たちは馬を降りた。本當なら夜通し逃げたいところだけど、灯りなしに走るのは危ないし、馬も休ませなくてはいけないから、ひとけの無い森の中で野宿することになったのだ。

グルドさんは馬に積んでいた荷物の中から分厚い布を取り出して地面に敷くと、私をその上に座らせた。そして自分も隣に座り、「晩メシだ」と言つてパンとチーズ、リンゴを手渡してきた。

「……」

「食わないのかい？」

ナイフでパンに切れ込みを入れ、チーズを挟みながらグルドさんが言つ。

私は貰つた食材と、馬に積まれていた荷物へ視線をやりながら聞いた。

「なんだか準備万端ですね。グルドさん、最初から私を助けて逃げよつとしてくれてたんですか？」

彼は私のパンを取り、同じよつに切れ込みを入れながらゆるく笑つた。

「チノちゃんが殺されることは昨日の段階で決まつてたからね。別に『絶対助けるぞ!』と思ってた訳じゃないんだけど、まあ、一応準備はしておくかと思つてね。君のことは前から気になつてた。間違つて召喚されるなんて哀れだと」

気づかなかつた。グルドさんが私のこと気にかけてくれてたなん

て。

「何だか少し嬉しくなる。あの城の中には、マリンさんの他の誰も温かな人がいたんだなあ、と。

「グルドさんはパンを私に返しながら言った。

「王の命令によつて罪のない人間が殺されることは今まで何度もあつたし、俺も黙つてそれを見過ごしてきました。今まで殺されたのは皆、クロッカの国民だつたからな。形だけでも忠誠を誓つた王に殺されるなら、それもまた運命つてね」

私はパンやリンゴを膝の上に乗せたまま、黙つて話を聞いていた。ランタンの揺れる灯りを受けて、グルドさんの顔は赤く燃えている。「だけど君はこの国の人間じゃないでしょ。『死ね』というあの王の命令に従う義務はない。だから助けた。さつきも言ったように、元直前まで助けるかどうかは迷つてたんだけどね。チノちゃん、毒薬投げ捨てて必死に抗おうとしてたからさ。助けずにはいらんなかつたのよ」

そこまで話を聞いて、そういえば助けてもらつたことにお礼を言つていなかつたと気づき、私は口を開いた。

「ありがとうございます。どんな理由でも、助けてくだせつて嬉しかつたです。グルドさんは私の命の恩人です」

グルドさんは大人っぽい笑みを浮かべて私の頭をぐしゃぐしゃと撫で回すと、持つていたパンにかぶりついた。一口が大きいので一気に半分くらいなくなる。私はその豪快な食べっぷりに目を奪われつつ、自分のパンをかじつた。

「グルドさんは革袋に入った水を飲んだ後で言つ。

「命の恩人だなんて言われると恥縮しちゃうね。俺に命を救われたなんて思わないでいい。タイミングも良かつたんだよ。実は俺もそろそろあの国を出ようと思つてたところだつたから、そのついでにチノちゃんの事もつれて逃げたとでも思つておいでくれ」「なぜ国を出ようと……？」

遠慮がちに聞くと、グルドさんは一瞬と笑つて答えた。

「元々クロッカの人間じゃないからさ。俺はシロルの兵士だ。密偵として、クロッカにもぐり込んでただけのこと」

のんきに言うグルドさんに、私は目を見開いた。

彼はスパイだったのだ。

「もう10年近くはクロッカにいるな。うかとの戦争が始まる前からクロッカ兵になりますまして、内情を探つてた。あの王はとにかく強い奴を自分の周りに置きたがるから、結構簡単に近衛まで出世できたのよ。だが、そろそろ戦争も本格化していくからと、シロルから帰還の命令が出てたし、どのみちひと月以内にはクロッカを出るつもりだった。まあ、その場合はもつとひつねり逃げたけどね」

そう言つて、グルドさんはいたずらっぽく笑つ。

彼はあつという間に自分の分の食事を平らげてしまつたが、私はまだ3口しか進んでいなかつた。少し急ぎ氣味にパンをかじり、ほつぺたに詰めこみながら言つ。

「そつか、グルドさんはシロルの国の人だつたんですね。じゃあこれから私たちはシロルへ逃げるんですか？」

私の質問にグルドさんはうなづく。

「やうこう」と、国境を越えてシロルに入れぱどりあえず安心だから、もうちょっと頑張つてくれよ。若い女の子は、こやつて野宿すんのも辛いだらうけど」

「ううん、大丈夫です。野宿くらい何でもないですから」

「いいコだねえー」

ふにやつと田尻を下げて、グルドさんがまた私の頭を撫でた。完全に子供扱いされてない？

「私、もう二一歳なんですけど…」

「これは失礼、レディ」

「グルドさんはわざとらしく書つと、胸に手を当てておじぎをした。なんかまともに相手されてない気がする。」

「馬に乗つてた時も、きっとドキドキしてたのは私だけなんだろうな。女としては見られてないのかもと考えると、安心なような悲しいような、微妙な気持ちになつた。」

「話題を変えよう。」

「クロッカとシロルの戦争つて、どっちが勝つと思いますか？」

「あの王様や大臣たちの味方はしたくないから、私はクロッカは応援できないな。もちろん本当は戦争自体しないでほしいけれど、それは私の意志ではどうしようもない。」

「私が聞くと、グルドさんはあ」に手を当て、少し悩んでから答えた。

「シロル兵としては、勝つのはシロルだと言いたいとこだね。実際負けるつもりはないし。だが、客観的にみるなら……んー、五分つてとこかな。勝つか負けるかは本当に分からぬ。戦力が均衡してるんでね」

「私はちょっと驚いて言った。」

「そりなんですか。あの王様が一番上にいるんだから、クロッカは大したことないのかと思つてました。逆にシロルには、グルドさんみたいな優秀な人がいるんだし」

「思ったことをそのまま言つと、グルドさんは照れたように頬を搔

いた。

「ま、俺はともかく、確かにシロルには優秀な兵が多いよ。だけどシロルはクロッカに比べると小さい国だからね。比例して人口も、兵の数も少なくなる。クロッカは玉石混淆の軍だが、とにかく人数が多いからな。精銳ばかりでも少數のシロルは苦戦することになりそうだ」

自分がどれだけ平和な世界にいたのか痛感する。戦争が本格化したら、グルドさんも戦いに出るのだろうか。

「もしシロルが勝つたら、クロッカの国民はどうなるんですか？殺したりしないですよね？」

城にいた侍女のマリンさんの顔を思い浮かべた。彼女にも無事に戦争を生き残つてほしい。

「そんなことはしないさ。民間人はもとより、抵抗をやめれば兵士でも殺したりはしない。それにシロルが勝つた方が、クロッカの国民も幸せになれると思うけどね。うちの王はここの中王ほど馬鹿じゃないし、今より生活は豊かになるはずだ」

「逆にクロッカが勝つたら？」

「最悪だね。シロル国民の多くが惨殺されると思うよ。俺がいた間にちょっとだけ矯正したけど、基本的にクロッカは兵の教育がなつてないから」

私は顔を歪めた。

「絶対に勝つて下さいね」と訴えると、グルドさんは「そのつもりだ」とほほ笑む。

「それ、もう食わないのか？」

ふと視線を落として、グルドさんが言った。視線の先には、私の
リンゴと食べかけのパン。

実はあまり食欲が無かったのだが、残すのももったいなくて、どうしようかと思っていたのだ。

「あの、お腹いっぱいになつてしまつて……」

「じゃあリンゴはまた明日食つか」

グルドさんはそう言つてリンゴを仕舞つた後で、私が持つていたパンの残りをひょいとつまみ、

「これは俺が始末しておく」

口に入れた。

「……！」

自分の頬が赤くなつていくのが分かる。グルドさんは何も考えていない様子でパンを咀嚼しているけど、それ私の食べさしだよ！？と動搖してしまう。

これつて間接キスになるのだろうか？ 私がかじつたものなのに、汚いとか思わないのかな？

嫌いな人に対してはそんな事しないはずだから、グルドさんは私のこと、食べ残しを食べられるくらいには好意を持つてくれている？

……考え過ぎ？

とっくにパンを飲み込み、寝る準備を整えているグルドさんの横で、私は一人もんもんとしていた。自分の食べかけを男の人に食べられることが、何でこんなに恥ずかしいんだろう。

グルドさんはもつたないからパンを食べただけなんだ。特にその行為に意味なんてないんだから。と、自分に言い聞かせる。

「おーいチノちゃん、そろそろ寝るよ」

グルドさんは地面に敷いていた厚めの布の上に寝転び、私を呼んだ。体の上にはもう一枚別の布を掛けているのだが、それをペラリと持ち上げて手招きする。

え……？ 隣で寝るの？

固まっている私を見て、グルドさんはいつと申し訳無れりつゝ
言つた。

「「あんね、この布一組しか無いんだわ。嫌なら俺は地べたで寝る
よ」

私はハツと息を吸い込む。

「い、いいえ！ 嫌じやないです。グルドさんを地べたで寝かせる
なんてできません」

「そう言つてくれると思つた」

あはは、とグルドさんが笑う。

「ま、安心してよ。チノちゃんみたいなウブな子に手を出すほど
おじやん飢えてないから」

その言葉に安心すると同時に、おひつだけマツとしてしまつた。
本当にグルドさんは、私のこと女として見てないんだなつて。
かといって、もちろん襲つてほしい訳ではないけど。

我ながら面倒くさいやつ……。

私はいそいそとグルドさんの隣に寝転んだ。

「わうちゅうといひち来ないと、そつちの腕出しますよ、お嬢さん」

しかしどうとグルドさんに引き寄せられ、一瞬に恥ずかしさと

緊張がこみ上げてきた。

私は仰向けに寝転がっているけど、グルドさんはこっちに体を向けて片ひじをつき、頭を支えている。

ち、ち、ち……近い。すぐ近い。グルドさんの顔がすぐそこに

鼻高いなあ。歳の割に若々しい顔つきだし、無駄な肉がない。私
みたく、ほつぺがブニブニしていないので。

「明日はどこかで服を調達しないとなあ」

緊張でガチガチな私に対し、のんびりとそんな事を言つて居る
グルドさんに、また少し苛立つてしまつ。
なんだろう、この気持ちは。

私のこと全然意識してないっていひながら、いひしてやる！えーい！ と気合いを入れて寝返りを打つと、私はグルドさんの胸に顔を寄せて密着した。

「何？ どうしたの？」

驚いたのだろうか、グルドさんの肩がビクリと揺れたのを感じて、
ムはほ笑ひ。

「寒いので」

彼が少しでも動搖してくれたことに満足しつつ答えた。だけど本当にこうしていると温かい……

最初の緊張はどこへやら 疲れでいた「」ともあらずで
りとグルドさんの腕の中で眠りに落ちた。

「ちよっと……おじさん若い奴よりは我慢強いけど、まだ枯れてはいないんだけど……。なにこの新手の拷問」

そんなこんなで3日が過ぎ、私たちはクロッカを上手く抜け、隣国のシロルに入ることができた。グルドさんの逃げ方がよかつたのか、追つ手に見つかることもなかつた。私一人ではこうはいかなかつただろ「つか、ほんと彼に感謝だ。

シロルでの目的地は城だつた。グルドさんが密偵として得た情報を味方に伝えなければならないし、クロッカが召喚術で勝利の女神を喚び出そうとしていたことも含めて、私のこともシロルの王様に話すという。

不安げな顔をする私に、シロルの城ではクロッカでのよつな扱いを受けることはないと約束してくれた。

クロッカに戻るのは嫌だし、これからシロルの国で生きていくことになつても不満はない。だけど心細いのは、知らない国で一人で生きていかなければならぬことだ。

グルドさんは何かと世話を焼いてくれそつだけど、ずっと一緒にいてくれる訳ではないんだし。

私はなんとなく、城へ着くのが憂鬱になつていた。城へ着いたら、2人きりの逃亡劇は終わつてしまつ。

グルドさんはシロル兵として戦争に集中しなきやならなくなるし、女神でもなんでもない私は一般人として生きていくことになり、き

「ヒグルドさんと会うことでも難しくないが、
そう考えると寂しくてたまらなくなるのだ。

「ちょっと町を見回つてみるかい？」

シロルに入つてから2日。サー「デュ」という大きな町に着いたところで、グルドさんが私を誘つた。

今までひたすら逃げるだけだったけど、シロルに来てからはゆっくりと旅を進めていた。クロツカの追つ手はここまで来られないから、焦る必要はなくなつたのだ。いつ見つかるかとコンコンする必要もない。

町の宿に荷物と馬を預けて、私たちはサー「デュ」の町に繰り出した。宿から近い通りでは様々な店が屋台を出しており、活気があり賑やかだつた。ちょうど地元のお祭りの日だつたらしく、人が多くて前に進むのもひと苦労。

屋台では、美味しいそうな食べ物やあざやかな織物、手芸品、美しい宝飾品なんかも売つてゐる。違う世界から来た私にとつて、どれも見慣れない珍しいものだ。

「あれ何ですか？」

黄色い芋のようなものを蒸して売つてゐる屋台を指差した。私がクロツカで食べていたお芋はもつと白かつたんだけどな。

「ああ、あれはアルタつつー芋だよ。蜂蜜をかけて食つんだ」

「お芋に蜂蜜を？」

「甘くて美味しいよ。買つてくるから食つてみ」

そんなつもりで言つたんじゃないのだが、グルドさんはさつさと屋台の方へ行き、両手に一つずつ蜂蜜のかかつたお芋を持って帰ってきた。皮がついたままの熱々のそれを受け取つて、お礼を言つ。

「すいません、お金は稼げるよつになつたら返します。こつになるか分かりませんけど、必ず」

「律儀だねえ。だけじこれくらこおじりせて。年下の女の子に金せびるほど貧乏じゃなによ、俺は」

「けど、宿代とか洋服代とかも出してもらひつくるし……」

食い下がつたけど、グルドさんは「こいつの場合、男が払うのが普通だから」とか言つて聞いてくれなかつた。

「すいません、ありがとうござります」ともつ一度お礼を言つて、木でできたヘラのようなスプーンでお芋をすくつて口へ運ぶ。お芋はしつとつとなめらかで甘く、デザート感覚で蜂蜜にもよく合つていた。

「美味しい……！」

「だろ？」

感激して目を丸くすると、グルドさんは穏やかに笑つた。

その後も動物の形をした飴だつたり、バナナの揚げたのだつたりを買つてもらいながら私がねだつたんじゃない、グルドさんが買つて与えてくるのだ、町をつるつると歩き回つた。

しかしそうそろ宿に戻ろうかと思つた時、ふと隣にグルドさんがいないことに気づいたのだ。

人が多いから、はぐれなによつに注意してたつもりなんだけど……

「グルドさん？」

とりあえず呼びかけてみるが、周りの人たちの喧嘩にかき消されてしまう。人の波をぬって、くせ毛の黒髪を探してみるが、どこにも見当たらない。いつ、どこではぐれたのかも分からなかつた。

「グルドさん！」

ちょっとだけ焦る。

どうやら私、迷子になつたようだ。

「一旦、宿に戻らうかな」

しばらくグルドさんを探したけど、結局その姿を見つけることはできなかつた。人が多くて無理だ。

きっとそのうちグルドさんも戻つてくるだろつし、と、私は宿のある方向に歩き出した。

が。

宿の部屋へ帰つて1時間経つても2時間経つても、待ち人は來たらず。グルドさんは一向に戻つてくる気配がない。

まだ私のこと探してゐるのかな？ もう一度通りに出た方がいい？ でも入れ違いになるかもしれないし……

部屋の中では待機しながらさうに1時間以上が経ち、外はすっかり暗くなってしまった。窓から通りの方を見てみると、もう店や屋台は閉められていて、人通りもなくなっている。

さすがにおかしい。グルドさんは何をやっているんだろう。

部屋のろうそくもつけず、薄闇の中でじっと彼の帰りを待つている内に、私の頭にある考えが浮かんでしまった。

まさか、置いていかれた？

まさか置いていかれた?

私をつれて逃げるのが、もう面倒になつたとか? 荷物はこの部屋に置きっぱなしだが、野宿の時に使つた布や服の替えが入つているくらいで、貴重品はグルドさんが持つたままだし……

グルドさんはそんな事する人じやないとは分かつてゐるけれど、不安で心細くて、考えが暗い方へ行つてしまつ。

だつて3時間も戻つてこないなんておかしいよ。外の人通りはほとんどのくなつていて、グルドさんがまだ私を探してゐるとは思えない。

外に行つて、馬をつないでいる小屋を調べた方がいいだらうか。でも、そこに馬がいなかつたら、私が置いていかれたのは確実になつてしまつ。

……どうしよう。見に行きたくない。けど、確認はしておかないと。

もし本当に置いていかれたのなら、これから自分でどう生きていいくか考えなればならない。この国のこと、ほとんどの知らない私だけど、雇つてくれるといふはあるだらうか? 一人でちゃんと生活していけるだらうか?

もう、グルドさんには会えないのかな……

「うじうじと考えてこるうちに、涙が込み上ってきた。親に置いていた子供じやあるまこし、これくらいで泣くなんてと思つけど、

グルドさんの姿を思い浮かべるとビックリしようもなく悲しくなる。とにかく馬小屋を確認しに行こう。そう決意して立ち上がった時だった。

「ああ、よかつた。ちゃんと戻つてたね、チノけやん

部屋の扉が開いて、ホッとした表情のグルドさんが現れたのだ。

「遅くなつて悪かつたね って、泣いてる?」

置いていかれた訳じゃなかつた。置いていかれた訳じゃなかつたんだ。

そう理解して安心し、一気に気が緩んだのか、私の目からはボロボロと涙が溢れ出していた。

「よ、よかつた……つ、置いていかれたかと、思つ……」

ヒックとしゃべり上げながら言つて、グルドさんはおひおひと狼狽し始めた。

「こ、いやこや……君を置いていく訳ないでしょ。ここだからちよつと落ち着いて。じつおいで」

つい、と泣き続ける私の腕をグルドさんが引っ張る。彼は寝台に腰掛けると、私を横向きにして膝の上に乗せた。恥ずかしくて涙がちよつと引っ込む。

「ほり、泣かないで」

少し日に焼けた無骨な指が、涙に濡れた私の頬をねぐづ。

「今まで何してたんですか？」

じりりとグルドさんをねめつけた。安心したら、今度は「不安にさせやがって、このこのつ！」という怒りが湧いてきたのだ。

グルドさんは困ったように笑つて言つ。

「チノちゃんと逸れたことに気がついて、しばらく人ごみの中を探しまわってたんだけど、ある店のおばちゃんが『やつを若い女の子が男らに無理矢理連れられていったよ』なんて言つたのよ。だから俺はてつくりそれがチノちゃんだと思つてさ。路地裏から何から血眼になつて探ししまわつてたわけ」

私を膝に抱えているグルドさんから、薄く汗の匂いがしている理由が分かつた。私がさらわれたと思って探してくれてたんだ。

「で、そいつら見つけて女の子はチノちゃんじゃないと気がいたんだけど、放つて帰ることもできないしつてことで、チンピラどもをシメて、彼女を家まで送つてたりしたらこんな時間に……。一人にして悪かつた、不安だつたよねえ」

よしよしと髪を撫でられて、私はちょっと赤くなった。

何だか恥ずかしい。グルドさんは必死で私のことを探してくれてたのに、置いていかれたんじゃないかと疑つて、心配してたなんて。

「泣き止んだ？」

「はい、すいません」

「いいよ、何で謝るのよ」

「実はこれに気を取られてて、チノちゃんの」と見失しちゃったんだよね」

「実はこれに気を取られてて、チノちゃんの」と見失しちゃったんだよね」

取り出したのは、華奢な金色の鎖にいくつかの小さな薄桃色の石がついたブレスレットだった。

可愛らしいデザインのそれをじっと眺めて、何だか意外だなと私は思った。

「グルドさんってそういうのが好きなんですね。ちょっと可愛すぎる気もしますけど……うーん、似合つと思いますよ、たぶん」「いや、似合つと思つてないでしょ。つーか、俺がつけるんじゃないから」

呆れたようにグルドさんが言つ。

「これは君のために買つてきたの」

グルドさんの黒曜石みたいな瞳が、真つ直ぐに私を射抜く。

「え……私に？」

田を見開き、彼の手のひらに乗つた可憐なブレスレットを見つめた。男の人からプレゼントを貰つなんて初めてだ。

「すごく嬉しいけど、これは……

これを貰つたら……

私はぐっと唇を結んだ。

「せっかくですけど、私は受け取れません」

拒否されるとは思つていなかつたのか、グルドさんは少し驚いた
よつな顔をした後、苦く笑つて言つた。

「アクセサリーは重かつたかな。けど、君に似合つだひつなと思つ
て買つただけだから、他意はないよ。遠慮せず受け取つ
「他意がないなら、なおさら受け取れないです！」

早口で小さく叫んだ後、うわーんと声をあげて再び私は泣き出しだ。
グルドさんと出会つてから、何だか情緒不安定だ。召喚されてこの世界へ来てしまつた時だつて、こんなに大泣きはしなかつたのに。

「そんなの買つたら、私グルドさんのこと忘れなくなるじゃないですか！ ブレスレット見るたび、グルドさんを思い出すんです！ もうすぐ離れなくちゃいけないのに……」

しばらぐの沈黙の後、グルドさんは困惑したよつて口を開いた。
「つい、と泣いてグルドさんの肩に顔をうづめる。

「もうすぐ離れなくちゃいけないって？」
「だつてそうでしょ？ 一人きりの旅はシロルのお城に着いたら、終わっちゃいます」
「まあ、それはそうだねえ。……けど、『その後も一人一緒にいる』
つていう選択肢もあるんじやないかな」

静かにつむがれたグルドさんの言葉を聞き、私は泣くのを止めて顔を上げた。口をポカンと開けて、きつと間抜けな顔をしているだろつた。

私が グルドさんは頬を搔いて 照れてる時にするじぐさだ
ら微妙に視線を外しながら言つ。

「 というか、それは俺の勝手な望みだと思ってた。君はまだ若いからこんなおじさんには興味がないだろうし、城に着いた後は同じ位の歳のいい男を探すだらうって。だけど今のチノちゃんの言い方を聞いてるとまるで…… 」

卷之三

彼の言葉を、途中で私が引き継いだ。

今世にと
自分の気持をにこねり自覺したのた

「ていうか……うん、好きです、すうへ

自分の気持ちに気づいたら、何だかすっきりと爽快な気分になつた。今まで感じていた不安感に説明がついたからだろうか。グルドさんの言動に一喜一憂していたのも、彼の事が好きだったからなんだな。

「チノちゃん、嬉しいけど……ちょっと冷静に考えて」「らん」

動搖しつつ、グルドさんが言う。

「シロルの城に着いたら、俺より若くて外見のいい男はたくさんいるよ。今まで、君はこの世界に親しい人間がいなかつた。だから一番近くにいた異性である俺を好きになつたと勘違いしてんじゃないのかな」

キッとグルドさんを睨み、震える声で言つた。私の恋心を受け入れるとは言わないけれど、否定はしないでほしい。彼を好きだという気持ちは、確かに私の心の中にあるの。」
じんわりと切なさがこみ上げる。

「グルドさんは私のことを助けてくれたし、旅をしてる間もずっと優しくしてくれました。『一番近くにいた異性だから』といつ理由で、私はグルドさんのことを好きになつたわけじゃないです。一番近くにいたのがグルドさんだから、私はあなたのことを好きになつたんです。なのにそれを……勘違いだなんて言わないで……っ」

顔をくしゃりと壓めて涙をこぼすと、グルドさんは慌てたように私の頭を撫で、「『めん』を何度も繰り返した。

「『めん』年を取ると慎重になつてね。相手の気持ちをちゃんと確認せずにほいられないのよ。情けないけど、『やつぱり他の人がいいかも』なんてチノちゃんに捨てられるのが怖くてね」

そこまで言つと、グルドさんは声を落としつらへやへつと続けた。

「俺も君の事が好きだよ。 素直で可愛くて、たまに気の強いところがね」

グルドさんの大きな手が、私の頬に添えられる。 そつと顔が近づいてきて、じれつたいほどゆつべつと唇が重なつた。

初キス＝唇をくつつけるだけの軽いキスだと思つてたから、私の中にグルドさんの熱い舌が入つてきた時にはちょっとひるんだ。 全然嫌じやないんだけど、気持ちよくて背筋がぞわぞわして、何だか変になりそう。

思わず体を離そとしたけれど、頭と腰をがつつり固定されてて動けない。頭がぼうつとして、のぼせてしまつ。

「……つは」

やつと唇が離れたかと思つたら、息継ぎもせずにまた塞がれる。

「んッ……」

なんせ私はキス初心者なので、されるがまま、グルドさんを受け入れる事しかできなかつた。
キスつて結構、体力勝負なものなのね。
そろそろギブしてもいいでしょうか。

＊＊＊

「おはよウ」

朝起きたら、グルドさんの精悍な顔が目の前にあつた。
そうだ、この部屋には寝台が二つあるけど、昨日は一つの寝台で一緒に寝ることにしたんだつた。

「……おはよウいりやいいます

布団を口元までかぶつたまま、小さく挨拶を返した。キスした事を思い出してしまつて、すぐ恥ずかしい。

グルドさんが「ゆつくりね」と言つたので、結局昨日はキス以上に発展する事はなかつた。だけどそれだけでも、こうやって改めて顔を合わせると照れてしまうのだ。

軽く身じろぎすれば、私の右手首で細い鎖がしゃりと鳴つた。
昨日貰つた、あのブレスレットだ。

私この人と両想いなんだなあ、とグルドさんの顔を見ながら思つ。恥ずかしくて嬉しくて胸が高鳴るような感じ。

「寝癖ついてる」

グルドさんは笑つて私の髪をすいた後、そこにチヨッと口づけを落とした。

なんという素敵なまどろみの時間。
彼がいてくれるのなら、この世界でも強く楽しく生きていけそうな気がした。

ああ、でも……

まだ本格化はしていないが、この国は今戦争中だ。
兵士であるグルドさんが、クロッカとの戦いで命を落とす可能性も十分にある。

「そろそろ起きようか」

「はい」

私は心中で祈った。
勝利の女神アプロディティー様、どうかこの国に味方して下せ。この大切な人が、戦争で傷つきませんように。

それからお城に着くまでには、さらに4日かかった。そもそも疲れの溜まつてきていた私を気遣つて、グルドさんがゆっくり馬を走らせたからだ。

この国の事を何も知らない私のために、町を案内してその生活の

様子を見せてくれたりもした。

お互いの気持ちを認識してから、グルドさんの態度はちょっと変わった。今までよりも優しくなったし、甘くなつた。

寝台まで朝食を持ってきてくれたり、起きる時にブーツを履かせてくれて紐を結んでくれたりと、どこかの若奥様だと思つほど、かいがいしく面倒をみてくれるのだ。

「いいです、自分でやりますから」という私の言葉は、一切聞こえていないうらしい。

あとは身体的接触が明らかに増えた。

町を歩いている時にさりげなく腰を支えられていたりして、半径1メートル以内には常にグルドさんがいるような状態。

一人きりになつた時など言わずもがな。キスは雨のようにな降つてくるし、とにかく密着、密着。

グルドさんつて結構愛情表現の激しい人だつたらしい。

それでも大人の余裕はあるらしく、本格的に手を出してはこない。そういう経験のない私に合わせてくれるみたい。

私は初めてできた恋人にドキドキと緊張しながら、しかし楽しくこの4日間を過ごした。

「見えてきたな」

「わ、大きいですね」

そして、やつとたどり着いたシロルの城。

その外観はクロツカの城とは違つて派手さが無く、さりげやかでもなかつた。しかし重厚で貴祿があり、隙がない。富殿というより要塞といった感じの城だ。

「何だか緊張します」

「だいじょーぶ。俺がいるからね」

グルドさんはやつ言つてほほ笑むと、城の方角へと馬の鼻先を向けた。

門を通りて城の敷地内に入ると、グルドさんはその辺を歩いていた若い兵士に馬の世話を頼んだ。

「あれ？ グルドさん？」

城の回廊を歩いていると、爽やかな雰囲気の兵士が声をかけてきた。どうやらグルドさんの知り合このようだ。

「おー、ラックスか」

「お久しぶりです。前回戻られたのが1年前でしたから、それ以来ですね。……おや、そちらの女性は？ 可愛らしい方ですね」

ラックスと名前前は爽やか兵士さんは、グルドさんと挨拶を交わした後、色を含んだ眼差しを私に向けた。

グルドさんは言つ。

「彼女の事は後で紹介する。ついでだからお前も一緒に陛下のところまで来てくれるか？ 何度も説明すんのは面倒だから、アスクたちもまとめて来てほしいんだが」

「アスク閣下たちは今、城にはおられませんよ」

「ならないや。とりあえずお前だけ来い」

「分かりました」

「こうじとこちゅうに笑いかけてから、ラックスさんは私の隣に並んで歩き出した。反対側にいるグルドさんが、何気にぐいと私の腰を寄せる。

「もしかしてそういう事ですか？」

ラックスさんが残念そうな声を出す。この人、穏やかな顔して手が早そうな人だ。私の中の淑女が、彼を警戒するようにと告げている。悪い人ではないんだろうけど。

「そーゆー事。お前の出る幕なし！」

グルドさんが勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

その時の私は「そういう顔もかつこいいなあ」なんて思つてしまつてたんだから、確かに彼の出る幕はないかもしれない。

「疲れてないか？ 隣下との面会は休憩を取つた後の方がよかつたかな」

「いいえ、私は大丈夫です」

気遣わしげに聞いてくれたグルドさんに、ほほ笑みを返す。シロルに入つてからは野宿をせず宿をとつていたから、特に大きな疲れはない。

「随分お優しいですね」

からかうようなラックスさんの軽口を、グルドさんはまるつと無視した。なんだかんだで仲は良いんだろう。

「よく帰つたなグルド。しかし予定より1ヶ月ほど早いんじゃないか？」

優美な調度品に彩られた部屋の中で、王様は私たちを待ち構えていた。

「色々と事情がありまして」

グルドさんがのんびりと答える。彼に続いて私、ラックスさんも室内へ入った。

この国の王様は、クロツカの王のように若くはない。50歳くらいで体が大きく、豪放磊落といった雰囲気の人だ。

王様は長椅子から立ち上がり、茶目つゝ氣のある視線を私に向かた。

「それはお前の連れて来たそのお嬢さんと関係があるのか？」

グルドさんはうなづく。

「ええ、実は……」

クロツカが召喚術で勝利の女神を呼び出そうとしたことや、私がその召喚に巻き込まれてこちらの世界へ来たことを、グルドさんは簡潔に話し始めた。

殺されそうになつた私を彼が助け、ここまで逃げてきたのだと説明すると、王様は哀れむように私を見て言った。

「災難だつたな。違う世界から、よつとよつてあのよつな国に召喚されるとは」

「はい……」

他に返す言葉もなかつたので、私は素直にうなづいておいた。災難だつたのは確かだ。

「長旅で疲れただろう。まあ座れ」

王様に勧められるまま、目の前の長椅子に座る。と、完べきなタイミングで侍女さんが部屋に入ってきて、私にお茶を入れてくれた。王様もグルドさんもラックスさんも、私以外の全員が立つたままで、一人座つてお茶を飲むのは気まずいんですけど。そわそわと落ち着かない私の様子を見て、王様が笑う。

「気にせず飲め。我々は甘い茶よりも酒の方が好きなんだ」

だから侍女さんは私にしかお茶を入れていかなかつたのか。

「では、頂きます」

私がカップに口をつけるのを見届けてから、王様がグルドさんを近くに呼んだ。

「で、クロッカの様子はどうだ?」

戦争や国勢に関する真面目な話が始まると、グルドさんも表情を引き締めた。2人で向かい合つて、真剣な話し合いを続けている。私こんな所にいていいんだろうか、と思ったが、追い出されないという事はいいんだろう。ラックスさんは王様たちの方へは行かず私の側に残り、何気ない世間話をして気を紛らわせてくれた。

しかし同じ部屋にいるのだから、グルドさんたちの話の内容も聞こえてくる。

「兵の数からして負けるわけがない、と高をくくつてましたから、うちに西の町エステルを落とされた事でクロッカは焦ったようですが

クロッカの内状を、グルドさんが静かに説明している。

「数ヶ月前から、まだ10歳かそこらの子供たちを集め、少年兵として鍛え始めてます。戦闘に関して素人の農民や女も採用して、とにかく兵士の数を増やしてんですよ」

「クロッカめ……」

王様が苦々しい顔をして舌打ちをする。

ラックスさんとお喋りしながらそっちの話を聞いていた私も、思わず顔をしかめた。子供を戦わせようとするなんて……やつぱりクロッカの王様や大臣たちは最低だ。あんな人たちが国を操っているから

「……！？」

その時突然、私の頭の中に声が響いた。

ラックスさんにもグルドさんにも変わった様子はない。私以外の人には聞こえていない？

私が動搖している間にも、声は頭の中で反響していた。少し低くて張りがあり、意志の強さと深い優しさを感じる女性の声。

この声はまさか、まさか……

「どうしました？」

息を詰め、ぴたりと固まつたまま宙を見つめている私に、ラックさんが気づいた。

「大丈夫ですか？」

田の前でひらひらと手を振つてくる。

しかし今はラックスさんに構つてゐる暇はないのだ。頭に流れ込んでくる声を聞き逃すまいと、私はまばたきも忘れて集中していた。

「チノちゃん？」

「ちの様子に気づいたグルドさんが、王様との話を中断して近づいてくる。急に応答しなくなつた私に、皆が注目しているのが分かつた。

だけどこの声を無視する事はできない。

「チノちゃん、どうした？……チノ！」

グルドさんが焦つた声を出し、私の肩を軽く揺する。
ちょっと待つて。私、今……

固まつてゐたのは、時間にして1分ほどだつただろうか。
私はふうと息を吐き出し、現実に戻つてきたかのようにパチパチとまばたきを繰り返した。

「チノ！ どうしたんだ？ 大丈夫か？」

心配したグルドさんが、早口で私に問いかける。

「大丈夫です。すいません」

「一体どうした」

王様は腕を組んで、訝しげにこちらを覗き込んでいた。

私は部屋の中にいる人たちを見回し グルドさんはもちろん、ラックスさんも王様も信用できる人だと思つ。頭の中の”声”も、そう言つていたし 、口を開いた。

「えつと、何から話していいのか……」

眉を下げる、一番近くにいる愛しい人を見つめた。

「グルドさんにもまだ言つていなかつたんですが、実は私
”天使”なんです」

「……は？」

部屋の中の全員が、『氣は確かか?』みたいな顔をしてじつちを見た。

「僕たちをからかっている訳じゃありませんよね？」

困惑した表情でラックスさんが問いかけてきた。
私はなるべく真剣な声を出して答える。

「ええ、大真面目に言つてます。私は天使です」
「…………」

みんなは無言で顔を見合せている。

突然天使だなんてカミングアウトされたら、そりや驚くだろうけど。

しばらく沈黙が流れた後で、グルドさんが口を開いた。

「じゃあこの世界に召喚される前、チノちゃんが住んでた世界ってのは……」

「天界です」

即答する。

「天界というのは確かに存在していて、天使や神もそこで穏やかに暮らしているんです。いきなりこんなこと言われても信じられないでしようけど……」

私が肩をすくめると、隣に腰掛けたグルドさんは一瞬考えた後、力強く言つた。

「いや……信じるよ。チノちゃんはそんな嘘つく子じゃないし。そ

れにそう言われれば、容姿だって天使っぽいもんねえ。金髪だし、色白だし」

長く伸びた私の淡い金髪を、グルドさんが優しく撫でる。彼は黒髪だし、ラックスさんや王様は茶色。シロルの町を歩いていても地味めな色の人が多くたから、この世界には金髪は多くないのかかもしれない。クロッカの王様くらいしか見たことないもんな。

「本当に信じてくれるんですか？」

私が聞くと、グルドさんは自信たっぷりにうなづいた。

「もちろん

「ありがとうござります」

彼が私の言葉を信じてくれたことが嬉しかった。天使としての私の存在を、天界という私の故郷を否定しないでくれた。

しかし疑つていなのはグルドさんだけで、他の人たちが天使だという事実を完全には信じきつていないうだ。王様は厳しい顔つきで、ラックスさんは戸惑った表情のまま、私を観察するように見つめている。

私にとつては、グルドさんが信じてくれただけで十分だけ。

「では、さつきは何だったんです？ 亩を見つめたまま急に動かなくなつて」

おずおずとラックスさんが口を開いた。

「えつと……普通の人間の人にとってはさらに信じがたい話をしますけど……なんなら話半分で聞いてて下さい」

と、前置きをしてから私は説明を始めた。

「クロツカが召喚しようとした勝利の女神アプロディー^テ様ですが、実は彼女もちゃんと存在しています。アプロディー^テ様は私を生み出した母であり、私が天界でお仕えしていた上司でもあるんです」「勝利の女神が実在する？」

王様が片眉をあげた。私の不可思議な話を聞いて、眉間にしわがよつてゐる。

この世界にも神を深く信仰している人はいるようだけど、でも、大多数の人はその存在を本気では信じていないのだろう。

特にこの王様は、困った事が起きても神に頼らず、自力でなんとかしてみせるつていうタイプっぽいし。別にそれは悪い事じゃないけれど。

「で、さつき私が固まつてたのは、アプロディー^テ様のお声を聞いていたからでして……。私が天界から消えてから、アプロディー^テ様はずつとその行方を探つて下さつていたらしいのです。だけどまさか人間界に召喚されているとは思わず、見つけるのに時間がかかつたと。『やつと見つけた』と声をかけて下さいました」

王様とラックスさんの訝しげな視線が気になつて、だんだんと私の声は小さくなつていつてしまつた。グルドさんは勇気づけるように私の背中を撫でてくれている。

しかし全員真面目で険しい顔をしていた中で、ふと王様が表情を崩した。

「うーむ。私はあまり神の存在を信じていなかつたんだがな。これからは食事前の祈りも真剣にやるとしよう」

「冗談めかした王様の言葉に、部屋の空気がすっと軽くなつた。ラックスさんも笑う。

「そうですね、僕も今晚からちやんとやります」

「グルドさんだけは眞面目な表情をしたまま、ぽつりと言つた。

「チノちゃんがアプロディー^テの下で働く天使だつたつてことは、クロツカの召喚術は案外いい線いつてたつてことだな。本当に勝利の女神を呼び出せてたかもしれないね」

「奴らはまた召喚術を使つと思つか?」

王様の瞳が一瞬で鋭くなつた。

グルドさんは腕を組んでうなる。

「いやあ、どうでしようねえ。チノちゃんの召喚を奴らは失敗だと思つてますし、あの王ももう召喚術には興味をなくして^{いた}ようですが……。この先戦況が危うくなれば、また召喚に頼る可能性もあります」

「たとえクロツカが召喚術を使つても」

グルドさんが喋り終わると同時に、私は口を開いた。

「そしてそれが成功したとしても、アプロディー^テ様は召喚に応じないと^思います。だつてアプロディー^テ様、今すつごく怒つてますもん」

そう言つて上を指差した。私の言葉に同意するよつて、今もアプロディー^テ様の声は頭の中に響いているのだ。

「私を地上に引きずり降ろしたあげく、殺そうとした事、怒つて下さっているんです。だからこの戦争も、クロッカの味方には絶対につかないとおっしゃつてます。『わたしの可愛い天使攫いやがつて。あいつらほんと調子乗り過ぎ。マジ一回シメる。徹底的に潰す』って……」

説明しながら、私は冷や汗を垂らした。アプロディー・テ様はちょっとぴりお口が悪いのだ。

グルドさんたちも微妙に顔を引きつらせている。王様は笑つてるけど。

私はコホンと咳払いをした後、気を取り直して話出した。

「アプロディー・テ様はこの戦争で、必ずシロルに勝利をもたらして下さるでしょう。グルドさんは五分だとおっしゃつていた勝率も、勝利の女神がつくことによつて格段に跳ね上がると思います。何もかもがシロルの都合のいいように進み、クロッカはほぼ自滅に近いかたちで負ける事になる。クロッカが子供や女性を使つていくら兵の数を増やしても、卑怯な戦法を使つても関係ない。天はシロルに味方しているんですから」

アプロディー・テ様の力は強大だ。それを『自分でも分かつていらっしゃるから、普段は力を抑えておられる』

だけど今回は「マジ本気出す」とキレつらつしゃるから、クロッカという国はあっけなく終わる事になるだろつ。神様を怒らせると怖いのだ。

私は続けた。

「戦争はシロルが一方的に勝つ事になるので、双方の兵や民間人の犠牲者も驚くほど少なくなるはずです。ただ、アプロディー・テ様の

怒りをかつたクロッカの権力者たちは、悲惨な最期を迎える事になるでしょうけど」

上の人間が愚かなだけで、クロッカの民に罪はない。アプロディーテ様はそう思つておられるみたい。私に優しく接してくれた侍女のマリンさんのことも、「きっと無事に戦火から逃がしてやる」と約束して下さつた。

そしてグルドさんの事も「守つてやる」と。

よかつた……

私は心の底から安堵した。
ホツとして隣にいるグルドさんにほほ笑みかけると、彼は「？」と首をかしげながらも笑みを返してくれた。

「どうした？ 何で笑つてるの？」

「内緒です」

「気になるなあ」

ふふふ、と笑い合う私たち。

王様はそれをしばらく眺めた後で、話を元に戻した。

「だが勝利の女神が味方してくれるからといって、気を抜く事はできません。兵士たちが緊張感を無くすといかんから、ラックスもグルドもこの話は口外するなよ」

その言葉に、二人とも「了解です」と返事をする。

確かに、勝利の女神が味方につきシロルが勝つのは決定的だと知つたら、気を抜いてしまう人もいるかもしれない。現にアプロディーテ様の力を信じきつている私なんて、戦争が終わつていないうちから、もうすっかり安心してしまつているもんな。

王様は、今度は私に向かって言った。

「お嬢さんが嘘をついているとも思えんが、完全に信頼する事もできんのだ。悪いが、君もあまり天使だ女神だという話は周りに言わないでくれ。それは君の身を守るためにもある。熱心な信仰者に目をつけられたらやつかいだぞ」

私は「はい」と真面目にうなづき、それを了承した。
もとより、私が天使だということや、アプロディーテ様に仕えて
いるといつような事をべらべらと言つぱらすつもりはなかつたし。
「それで君はこれからどうするつもりだ？ シロルに居たいといつ
のなら受け入れるが」

王様はこつちを真つ直ぐに見て言った。

「君の故郷が天界だといつのなら、空の上に帰るつもりでいるのか
？」

その質問には、私よりもグルドさんが反応した。ぴくりと肩を揺
らして息を詰める。

私が元の世界に帰るか否か。それは彼も気になつていながら、聞
けずにいた質問だったのだろう。

ゆるゆると首を振つて、私は答えた。隣でグルドさんが緊張して
いるのが分かる。

「悲しいけれど、私は一度と天界へ帰ることはできません。なぜな
らもう……私には翼がないから。背中に生えていたはずの翼が、ク
ロッカに召喚された瞬間から消えてしまつていてるんです」

天界にいた時、私の背中には確かに翼があつた。一対の小さな白い翼は、天使の象徴ともいいうべきもの。それが無ければ、空を飛んで天に帰ることもできない。

「きっと私はもう、天使ではないんだと思います。地上に降りてその汚れに触れた瞬間から、私はただの人間になつたのだと……。だからこそ、アプロディー様はあれほどクロッカにお怒りになつたのだとも言えますし」

私の話に反応して、頭の中に声が響いた。アプロディー様の力を持つてしても、私を天界に戻す事はできないらしい。だけど私のことは、「これからもずっと上から見守り続けるから」と言って下さつてている。

嬉しくて、心がじんわりと温かくなつた。故郷に帰れなくても、アプロディー様とこうやつて繋がつていられるなら寂しくない。私はこぼれそうになつた涙をのみこみ、ふわりと笑つて言つた。

「それに、たとえ天界へ帰れるという選択肢が残つていたとしても、今の私はそれを選ばないかもしません。だってグルドさんと離れるのは辛いですし……」

今までじつと黙つていたグルドさんを見上げると、彼は軽く目を見開いた後で、何故かぐつと表情を歪めた。

歓喜に満ちながらも泣きそうな顔をして、私を力強く抱きしめる。

「わっ！」

「『めん』

いきなりの包容に驚く私に、グルドさんは言つ。

「『ごめん、俺……チノちゃんが自分の世界に戻れないって知つて……す』」
「ごめん、『ごめんな』

私を抱く腕の力が、さらに強くなつた。

こんな風に素直で優しいグルドさんだからこそ、私は彼を好きになつたのだ。

「いいんです、気にしないで下さい。これからグルドさんがこの世界で、私のことを幸せにしてくればいいだけですから」

ニッと笑つて冗談ぽく言つと、グルドさんも顔を上げて嬉しそうに破顔する。

「約束するよ。必ずチノちゃんを幸せにする」

私たちは自然に顔を寄せ、喜びに満ちたキスを交わしていた。腕につけていたブレスレットがきらりと輝く。

頭の中で、アプロディティー様も祝福してくれている。その男なら大丈夫だ、と。

地上には天界はない苦しみや悲しみが溢れているけど、二人ならきつと乗り越えられるはず。

「いやつくなら一人きりの時にしてくださいよ」

「ああ、お前たちはそういう関係だったのか。随分若い娘を捕まえたな、グルド」

キスを続ける私たちの耳には、呆れるラックスさんの声と、感心しているような王様の声は聞こえてこなかった。

10 (後書き)

本編はこれで完結です。

あと1話、後日談的なものを載せて終わりにしたいと思います。
ここまで読んで頂き、ありがとうございました！

後日談（前書き）

新婚さんがイチャついてるだけの話。

最近シロルでは『バーツ』というボードゲームが流行っている。兵士に見立てた馬、象、犬なんかのコマを動かして、相手の『王』『ライオン』のコマを取つたら勝ち、といつゲームだ。

「王様、打ち取つたりー！」

高らかに声をあげると、私は自分の馬のコマで対戦相手のライオンのコマを倒した。また、私の勝ちだ。

「ぐむむ……」

向かい側に座り、苦い顔で手を擧げてるのは、このシロルの国の王様。

このところ、私はよくこの王様に城へ呼び出されていた。彼の『バーツ』の相手をするためだ。

「もう1回だー！」

負けず嫌いな王様が声を張り上げる。

「えー、もう12回目ですよ」

さすがにつんざつしてきて、失礼とは思いつつも思いきり嫌な顔をして言った。王様は普段は年相忯に落ち着いているのだが、こういつ時には頑固で子供っぽくなる。そこが親しみやすことこのりでもあるのだけれど。

「勝ち逃げは許さん」

「そんなこと言つたつて……」

ソフナーの背にもたれて、新しくコマを並べ始めた王様を見つめていると、ノックと共に部屋の扉が開いた。入ってきたのはグルドさんだ。

助かつた、と私は安堵する。これで『バーツ』の無限ループからは抜け出せそう。

「まだやつてんですか、陛下。何度やつたつてチノちゃんには勝てつこないつて分かつてんでしょう？」

グルドさんが呆れた様子で言つ。

1ヶ月ほど前に終わったクロッカとの戦争は、優秀なシロルの兵士とアプロティーテ様の『加護』のおかげで大勝したが、グルドさんはまだまだ後始末に追われていた。

王様だって、私とのほほんとゲームしている場合じやないと思つのだが……。

「分からんぞ。挑戦し続ければいつかは……」

「無理ですつて」

王様の言葉をグルドさんが切つた。

「うちの可愛いチノちゃんのバックには、勝利の女神様がついてんですよ。こんなお遊びのゲームでも、勝負事でチノちゃんが負ける事はないんですから」

グルドさんの言つ通り、どうやら私はアプロティーテ様のお力に

よつて、負け知らずな存在になつてしまつたらしい。

実はこの『バーツ』というゲームもこの前やつとルールを覚えたばかりなのだが、勝利の女神の加護を受けた私は、誰と対戦しても負ける事がないのだ。

王様以外の人たち グルドさんやラックスさんとも対戦したけど、結果は同じ。

この力を利用すれば、例えば賭け事なんかでがつぽりとお金を稼ぐことも難しくないのではないかと、天使らしからぬ事を考えてみたりして。

もちろん実際にはやらない……うん……やらないよ？

「 もう1回ですよ。そろそろ1つめの奥さんを解放して下せい。そして陛下はいい加減仕事して下せい」

そう言って、グルドさんは持つっていた書類のたばを王様の目の前にドサリと置いた。

私がグルドさんと結婚したのは戦争が終わつてすぐのこと。まだほんの3週間前だ。だからグルドさんに「奥さん」と呼ばれると、なんだか照れてしまう。まだ、自分が誰かの妻であるといつ事實に慣れていないのだ。

「 も、行こうチノちゃん」

グルドさんが私の手を引く。書類の山を前に険しい顔をしている王様を残して部屋を出た。

「 グルドさん、私お昼ご飯作つてきたんです。一緒に食べましょう」「 いいね。天気がいいから外へ行こうか」

緑の芝生が広がる訓練場の端、そこにはえている一本の木の根元に、私たちは腰をおろした。城の裏には様々な花が咲き乱れる美しい庭園もあるけれど、そこは花の香りが強すぎて、『』飯を食べるには少し不向きなのだ。

昼休憩の今の時間、訓練場にひと氣はなく、がらんとしている。太陽の光りが降りそそぎ、芝生はぽかぽかと暖かい。

「『』おいで」

バスケットに入ってきたサンドイッチを出そうとしている、グルドさんに腰を掴まれ、引き寄せられた。

「わっ」

私の体は彼の足の間に収まる。後ろからグルドさんの腕が回つて、ぎゅっと抱きしめられた。

「あー、癒される」

田をつぶつて、私のこめかみに頬を擦り寄せるグルドさん。最近忙しいみたいだし、疲れてるんだろうな。

「お仕事大変なんですね」

「まあ、ちょっとね。陛下みたいにワガママな上司とラックスみたいに生意気な部下に挟まれて、中間管理職は大変なのよ」

そう言って、『』談ぽく笑う。

私はラックスさんの爽やかな風貌を思い浮かべて言った。

「ラックスさんといえば、この前女性にひっぱたかれているのを見

ました。別れ話がもつれたのか、修羅場っぽい雰囲気で……。大丈夫だったのかな」

「大丈夫、大丈夫。それ、あいつにひとつでは日常茶飯事だから」

私の肩にあぐを乗せ、グルドさんがのんきに言ひ。かと思ひと、私を抱く腕の力を強めて面白くなさそうに続けた。

「チノちゃんが心配する必要ないよ。ラッククスの事なんてほつとけばいい」

顔を近づけてくるグルドさんにキスの雰囲気を察した私は、

「あの、お皿はん食べないと……」

と、サンドイッチに手を伸ばそうとした。

「後でいいよ」

しかしグルドさんは片方の手でバスケットに向かおうとする私の手を絡み取り、もう片方の手を私のあぐに添えた。後ろにいる彼の方へ少し顔の角度を変えられる。

外でキスするのは恥ずかしいんだけどなあと思いつつも、私は目を閉じてグルドさんの唇を受け止めた。拒むすると、すんぐ悲しそうな顔をされるから。

「……んつ」

「」の国の人たちは情熱的だ。恋人を抱きしめるのもキスをするのも、それは大事な愛情表現の一つ。毎日するのが当たり前と思つてゐるらしい。

「……」の人たちは、呼吸をするように自然にキスを交わす。

「はツ……」

深い口づけが終わり、お互の顔が離れると同時に、私は荒く息をついた。キスの間の上手な呼吸法については、まだ研究中だ。頬を染め、とろけた瞳で無意識にグルドさんを見上げる。しかし、そんな仕草はするべきではなかつたと、目の前で妖しく笑つた夫を見て思つ。

「かーわいい」

一旦離れた唇がもう一度近づいてくる。グルドさんの舌は柔らかく、熱い。

『可愛い』といつ言葉は、今や彼の口癖になつてゐる。ほんと、旦が合うたびに言われているんぢやないのかといつぐらー。だけどそれはもちろん嬉しいことだ。グルドさんに「可愛い」と言われるたび、本当に自分が可愛くなつていくような気さえする。

「……っ」

唇の端からだ液が垂れた。グルドさんは一度私の口内から舌を引き抜くと、だ液を舐め取つて、またキスを再開する。

グルドさんのキスは麻薬のよつに中毒性がある気がする。気持ちよくて頭が真つ白になつて、恥ずかしいのに求めてしまう。舌と舌が擦れ合うと、首筋から腰にかけて、ぞくりと痺れが走るのだ。

んつ、と息を吐いて、私は体を後ろへ引いた。名残惜しそうにグルドさんの唇が離れていく。

「…………」「はん……食べなこと」

艶かしい」の場の空氣に耐えられず、健全な方向へ話題を変えようとした。

が、再度バスケットに伸ばした手は、虚しく空を掴んだだけ。昼食の入ったそれは、私が掴むより先にグルドさんに奪われていた。グルドさんは腕を横に伸ばし、私が届かない位置までバスケットを遠ざける。そして、にやりと意地悪な笑みを浮かべて言うのだ。

「このサンドイッチを返してほしかったら、チノちゃんからキスしていいから」

「私から…………！」

カツと顔に熱が集まる。今まで自分からキスしたことなんてなかった。私がしたいと思う前に、いつもグルドさんからしててくれるから。

グルドさんはバスケットを遠くに置くと、私の体を持ち上げて、ぐるりと反転させた。彼の太ももの上に座つて、向かい合つようになかたちになる。

「無理ですよ、私からなんて恥ずかしいです…………」

眉を下げるしおりしく訴えてみるが、グルドさんは笑みを浮かべたまま。サンドイッチを人質にとるなんて卑怯だ。

今度は叱るよつて言つた。

「わつ！ 千両つぽこ」としないでください。早く「はん食べます

よー。」

しかしあはりグルドさんは動かない。「早く」と言つて、いたず

「……ひー」

数秒悩んで、私は覚悟を決めた。

なけなしの勇気を振り絞り、えい！ と身を乗り出して、グルドさんにキスをする。唇が触れあつだけの軽いキスだけ、自分からするのはやはり緊張する。

グルドキと胸を叩く自分の心臓の音を聞きながらゆくつと顔を離していくと、グルドさんが残念そうに呟いた。

「……それだけ？」

「それだけって何ですか！ 今のも私はぐく頑張ったのに……自分からキスするのに、どれだけ勇気がいるか……」

よよと立くふりをして、私は両手で顔を覆つた。こうこうリアクションをしておけば、グルドさんも以後、「チノちゃんからキスして」なんて言ってくる事はなくなるだらう、といつ安っぽい作戦なのである。

「チノちゃん……」めんね。ちょっと調子乗りました。泣かないで

しかしその安っぽい作戦にまんまと引っかかるのが、グルドさんの良いところでもあつたり。全く涙なんて出でていないのに、本気で心配そうに言ってくるのだ。

「チノ、機嫌直して」

そう言つてグルドさんは私の両手を外し、慰めるようにそっと面を寄せてきた。

……あれ？ またキス？

「んんッ……」

今日何度目のキスになるのだろうか。優しくも激しいグルドさんの愛を受けながら、私は考えたのである。

いつたい、いつになつたらサンドイッチを食べられるのかと。

後日談（後書き）

幼妻が可愛くて仕方ないおっさんの図。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856z/>

勝利の女神を喚び出せば

2012年1月14日21時50分発行